社会医療法人耕和会広報誌

2024年1月号
NO.304

ほすぴっ人

開院前の迫田病院を背景に記念撮影をする万里代氏（当時9歳）の姿

NO.304

社会医療法人耕和会
社会福祉法人耕和会
理事長
佐々木 万里代
（迫田）

新年のご挨拶

初代理事長の旅立ち、新理事長就任を経て。

　あけましておめでとうございます。新たな１年が巡ってまいりました。
昨年は、迫田耕一朗初代理事長の突然の旅立ちという、耕和会にとりましても大変大きな出来事がございました。いつもと変わらぬ多忙の中、最期の一日まで誠心誠意、患者様の診療にあたっておられました。大きな背中と朗らかな笑顔が鮮やかに蘇ります。
この法人の危機的状況を、皆様の真心と職員一人一人の平常心、チームワークで一緒に乗り切り、来る年を迎えることができました。励ましのお言葉やお支えに、私自身どれほど救っていただいたか計り知れません。その御恩を少しでもお返ししていくことができるよう、これからの一日一日を精一杯過ごして参ります。何卒よろしくお願い申し上げます。
元旦には石川県をはじめとする日本海沿岸地域で地震・津波による自然災害が発生しております。亡くなられた方々に心からお悔やみを申し上げます。
また被災された全ての方々にお見舞いを申し上げます。
耕和会の災害対策ＢＣＰへの取り組みも一層強化していかねばなりません。
ご協力を賜りますようお願い致します。

昨年末には、引継ぎに当たり様々な決断を致しました。今一度、耕和会のおかれている状況を振り返り、これまで取り組んで参りましたこと、将来取り組んでいくべきこと、そして今現在取り掛からねばならぬことを、ひとつずつ具体化している最中です。与えられた条件下で最善の道へ進むことができるように、そして一度選んだらその道を信じて進む勇気、信念をもつことを求められている気がいたします。

様々な過程で、一方で良かれとって思って決めたことが、もう一方では受け入れがたいことである場合もあるかもしれません。そんな時は、ぜひ直接会話をしていただきたいと思います。言葉だけでは伝えきれないことが、目と目、身振り手振り、その場の雰囲気でより伝わりやすくなるのではないかと思います。一度で難しい場合はもう一度。それでも難しい場合はさらに工夫が必要ということになります。なかなか理解できなくても、相手をわかろうとする努力が大切だと思うからです。
“自分だったらどう処遇されたいか”、初代理事長が常々申しておりました慈悲の心に通じる部分だと思います。

昼夜精力的に診療にあたられた(2023年10月10日撮影)

＊いま感じていること
今日この一日という時間、出会いは当たり前ではない、奇跡なのだということ。今という時を大切に過ごしたい、ぜひ大切に過ごしていただきたいと思います。

明朗、優和なお人柄あふれる書(2021年8月)

＊いま目指していること
耕和会を同僚に紹介したい、一緒に働きたいと思える職場にすること。自分や家族が利用したい、入院（入所）したいと思える場所にすること。
そのためには、職員の皆様一人一人の受け止め→考え→アクションが重要となってきます。地域の方々からのご指摘も真摯に受け止め、一歩ずつ近づく努力を共に始めたいと思います。

昨年11月の出来事。大学病院で初代理事長の出身医局の教授とお話を終えた帰路、雲の切れ間から突然、虹が現れました。虹が二つです。““ありがとう、頑張ってるね、まかせたばい““と語りかける前理事長の笑顔に触れた気がいたしました。
最近空を見上げる機会が増えました。朝日、夕日、青空、雲、一つとして同じ表情はないのだと改めて感じています。
初代理事長が築かれた耕和会の礎に立ち、その大らかな精神・心意気を胸に携えて、微力ながら更なる磨きをかけて前進して参りたいと思います。
皆様の心にも、たくさんのご褒美の虹がかかる、素晴らしい一年でありますように。
皆様とご家族が健康で、笑顔でお仕事がなされますように。
本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

広報誌「ほすぴっ人」命名の由来：
ホスピタル(病院)の独語'ホスピット'と'人'を組み合わせた造語。耕和会が一丸となり手を携えて歩む姿を表しています。